

蛋白減少効果が期待できるが、血圧のコントロールを優先すべきである。

9 ボクリボース口腔内崩壊錠（ベイスン® OD錠）へ変更後のHbA1cへの影響

鈴木 克典

済生会新潟第二病院代謝内分泌科

従来のベイスン®錠（従来錠）からベイスン® OD錠（OD錠）への切り替え後の効果について検討した。従来錠服用中の2型糖尿病患者に対し、無作為にOD錠に切り替え群、切り替えない群の2群に分け、次の来院時の臨床パラメーターの比較検討をした。

OD錠変更群110名、対照群27名で、年齢、性、BMI、収縮期・拡張期血圧、HbA1cで有意差はなく、糖尿病罹病期間、従来錠の1回平均使用量で有意な差を認めた。

OD錠へ切り替え後両群ともBMI、収縮期・拡張期血圧で有意な変化を認めなかった。一方、HbA1cがOD錠変更群では $7.2 \pm 1.0\%$ から $7.4 \pm 1.0\%$ へ、対照群で $6.9 \pm 1.3\%$ から $7.1 \pm 1.2\%$ へと両群とも有意な上昇を示した。HbA1cの変化量を両群で比較したが有意差を認めなかった。剤型を変えて、より服用を容易にしたとしても、患者自身が常時、食事療法、運動療法、薬剤服用の厳守に努力しなければ、HbA1cに改善にはつながらないと思われた。

10 注射部位に巨大な皮下結節を生じた糖尿病患者への外来インスリン指導により血糖コントロールが改善した3事例

野中 共子・川口 玲・上村 宗*

平山 哲*・相澤 義房*

新潟大学医歯学総合病院看護部
内科外来

新潟大学大学院医歯学総合研究科
代謝内分泌分野*

今回、インスリン注射を長期間同一部位に行ったことにより、巨大な皮下結節を形成した3事例

に外来で皮下注部位の指導を行った。事例1～3は、70～80歳代の2型糖尿病患者で、いずれもインスリン注射手技には問題はなく、腹部に1～2ヶ所にピンポン大の皮下結節が認められた。皮下注部位のローテーションを指導し、3事例とも指導2ヵ月後にはHbA1cが改善し、うち2事例はインスリンが減量となった。改めて、導入時の初期教育、外来での継続教育における注射部位の観察とローテーションの指導の重要性が示唆された。

	事例1	事例2	事例3
指導時 HbA1c (%)	14.1	10.4	9.5
指導2ヵ月後 HbA1c (%)	7.4	8.0	8.6
指導時 1日合計インスリン量 (単位)	46	70	26 内服あり
指導2ヵ月後 1日合計インスリン量 (単位)	37	66	26 内服あり

11 懸濁インスリン製剤の適正使用と血糖コントロール

渡部由美子・羽藤 京子*・伊藤 香*

大倉 哲夫**・百都 健***

佐渡総合病院薬剤部

同 看護部*

同 検査科**

同 内科***

【目的】インスリン自己注射手技は血糖コントロールへの影響が考えられる。インスリン自己注射手技を確認し、手技の血糖コントロールへの影響を明らかにする為に調査した。

【対象と方法】懸濁インスリン使用患者79名。自己注射手技と知識をマニュアルによって「正確な実施」「不正確な実施」と判定。HbA1c、使用後の残存インスリン濃度を測定した。

【結果】不正確な実施が多かった項目は、注入後のカウント55名、混和操作44名、注射のタイミング41名。正確、不正確な実施群の平均HbA1cは混和操作正確6.9%、不正確7.6%、注射のタイミング正確7.0%、不正確7.5%。不正確な実施の項目数2項目以内のHbA1c7.1%、3項目以上7.6%。残存インスリン濃度は不正確な実施2項目以内9.3%、3項目以上14.8%。

【考察】正確、不正確な実施群でHbA1cに差が